SETSUNAN UNIVERSITY

建築・都市

キーワード：まちの居場所、余白のデザイン

人の居方・居場所からの環境デザイン

理工学部　建築学科　准教授
小林　健治　KOBAYASHI Kenji

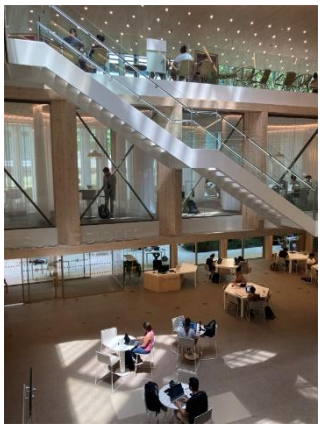
研究の内容

人間が生き生きと楽しそうに過ごしている場所における「心地よさ」や「過ごしやすさ」といった視点から、その場所に居る人間と周囲にひろがる環境との関係性について研究しています。例えば、地域住民の「居場所」として近年注目される図書館にはさまざまな居方*がみられます。図書館という場所でのさまざまな居方をささえているのは、ゆったりと過ごすことができる家具、他者と居合わせることができる書架、いらっしゃいませと言われない入りやすさ、などが考えられます。このように建物のハードな部分だけではなく、ソフトな部分も含めてその場所が生み出す質が深く関わっています。

さまざまな場所に対して研究を続ける中でわかってきたことのひとつに、「余白」の重要性があります。例えば、公園でピクニックをしているひとたちに関する研究では、その場で過ごす当事者自らがたくさんのものを持ち込み、その場所を使いこなすための指標を示しました。また被災地域の公衆衛生活動の拠点となる保健所の研究では、決まった用途がないロビーなどが、日常の活動と災害時の活動をシームレスにつなげる上で必要な場所であることを示しました。ものを持ち込むことができる、決まった用途がない、はいずれも、場をつくり込みすぎず、余白を残して場所をデザインしていると言えます。

多くの人がともに暮らす都市空間は、新しく、綺麗な場所がつくりつづけられ、その場所を利用する個人の居心地の良さは向上しつつあると感じる一方、余白が残された場所は多くありません。これからの未来が不透明な現代において、余白がある場所は必要と考えます。公的／私的を問わず、余白を有する場づくりの実現をサポートします。

＊居方とは、ある場所に人が居ること、またそこで生まれる風景の総称として鈴木毅が提唱した概念で「思い思い」「居合わせる」「たたずむ」などのタイプがある。



思い思いに過ごすことができる場所［ガブリエル・ガルシア・マルケス図書館］

公園でのひとときを楽しむために自分たちでものを持ち込み居場所を設えている様子［服部緑地］

産学連携・社会連携へのアピールポイント

- 地域の中で顕在化していない有形無形の資源を発掘し、各種メディア、グッズを提案すること。
- 公共性のある地域のコミュニティ活動の場づくりをサポートすること。
- 建築意匠設計実務の経験を活かしたさまざまな居場所の設計、デザインすること。
- 日常と災害時をシームレスに考える上での仕組みや場所を提案すること。

研究者総覧（小林　健治）

URL：http://gyoseki.setsunan.ac.jp/html/100001215_ja.html

お問い合わせは摂南大学 研究支援・社会連携センターまで
TEL:072-800-1160　E-mail:SETSUNAN.Kenkyu.Shakai@josho.ac.jp